

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月8日現在

機関番号：51601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520308

研究課題名（和文） ジェイムズ・シャーリーの『宮廷の秘密』の手書き原稿と出版テキストの比較研究

研究課題名（英文） Comparative study on the manuscript and the printed text of *The Court Secret* by James Shirley

研究代表者

石原 万里（ISHIHARA MARI）

福島工業高等専門学校・一般教科（英語）・教授

研究者番号：70280344

研究成果の概要（和文）：本研究の目的はジェイムズ・シャーリーの『宮廷の秘密』の二つのテキストである手書き原稿(manuscript)と 1653 年に出版されたテキストとの比較を通して、作家ジェイムズ・シャーリーの作劇に迫り、さらには作家、出版業界、劇団の力関係の考察にある。手書き原稿には削除、修正、加筆があり、その版を数えるとテキストは三つ存在することとなる。精査な比較を通し、同じ言葉が違う意味合いで使われていることがわかることから、作家シャーリーが、何度も原稿に手をいれる作家であったことは明らかである。シャーリーの特徴が、印象深い主人公にではなく、会話の積み重ねによって構築される人間対人間のドラマにあることも読み取れた。『宮廷の秘密』が収められている *Six New Plays* の六作品一作ずつに書かれた献辞は、劇場閉鎖前後の時勢を反映するものであり、作家シャーリーと出版業者 Humphrey Moseley との密接な関係をも表している。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to explore dramaturgy of Shirley by close analysis of the two texts of *The Court Secret*: the manuscript and the text in *Six New Plays* published in 1653. The manuscript has many excisions, alterations and additions, which means there are three different versions. The relationship between the dramatist and publishers is also examined. Through close analysis of the three texts, the same words are used differently in the same scene, which shows that Shirley seemed to rewrite the text again and again. His characteristics lie not in making unforgettable heroes or heroines but in building up human relationships by conversation. The dedications attached to each play in *Six New Plays* show not only the changing situation before and after the theatre closure but also the close relationship between Shirley and his publisher Humphrey Moseley.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学 書誌学

キーワード：ジェイムズ・シャーリー manuscript 劇場閉鎖

1. 研究開始当初の背景

ジェイムズ・シャーリー (James Shirley) (1596-1666) は Shakespeare, Fletcher, Massinger について、King's Men 座付き作家になった劇作家ではあるが、日本においても海外においても、それほど注目されてこなかった作家である。

シャーリーの『宮廷の秘密』(*The Court Secret*) は、1642年の劇場閉鎖の年に書かれ、劇場閉鎖のために上演の機会を失い、1660年の王政復古を経て、1664年に上演された希有な作品である。テキストは王位不在の時代、1653年に Humphrey Moseley によって出版されているが、その出版テキストとは異同のある手書き原稿 (マニスクリプト) が残されている。手書き原稿は、作家の手書きの原稿ではなく、その筆跡から The Earl of Newcastle の芝居 *The Country Captain* を清書した scribe によって書かれた清書原稿と考えられる。

多くの謎を背負った作品でありながら、この作品を論じているのは、1931年の R.G. Howarth の "A Manuscript of James Shirley's *The Court Secret*" in *R.E.S.* 一本だけである。その後 70 年以上経って、書誌学の分野は大きな発展を遂げているにも関わらず、Howarth を超える論文は出てきていない。

ジェイムズ・シャーリーの全集は、W. Gifford と A. J. Dyce によって編まれた *Dramatic Works* で 1833 年に出版され、その後全集が出版されていない。近年 Julie Sanders によって、そのフェミニズム的側面に光が当てられるようになってきている。注釈付きのテキストとして、E. M. Yearling を編者とする *The Cardinal* と Ronald Huebert による *The Lady of Pleasure* が 1986 年に出版されているだけだった。日本にて大井邦雄氏による『快樂夫人』が 2002 年に、2006 年には *The Seventeenth Century Plays on Women and Performance* として *The Bird in a Cage* が取り上げられている。現在、ジェイムズ・シャーリーの全集作成が進行中である。

2. 研究の目的

ジェイムズ・シャーリー (James Shirley) の『宮廷の秘密』(*The Court Secret*) には、手書き原稿 (manuscript) と出版されたテキストの 2 つのテキストがある。手書き原稿は、1642 年の劇場閉鎖の年に書かれて完成されていた版が元になっていると考えられている。一方のテキストは、1653 年に Humphrey Moseley によって出版されている。ふたつのテキストには異同がある。本研究は、出版テキストと手書き原稿の相違、さらには、手書き原稿に残された削除修正加筆部分を細かく分析することで、King's Men の座付き作家

であったシャーリーの作家としての足跡をたどり、さらには、劇場閉鎖時期の作家、劇団、印刷業界の力関係の変化を考察することを目的としている。

3. 研究の方法

大英図書館において、*Six New Playes* の書籍の現物にあたり、*The Court Secret* とその他の 5 作品の出版テキストの活字、紙、water mark の相違を比較検討する。*Six New Playes* の中で *The Court Secret* の出版登録だけが他の作品よりも遅いことはわかっている。作品そのものもあとから活字を組まれたはずである。その一方で、Oxford 大学 Worcester College にて、*The Court Secret* の手書き原稿の実物を精査することで、出版テキストとの比較検討をする。

The Court Secret の作品と *Six New Playes* の中に収められている他の 5 作品のテキストの内容の比較を行い、作品として *Six New Playes* の中で、*The Court Secret* に際立った違いがないかどうかを考察する。*The Court Secret* の手書き原稿と、出版されたテキストを比較し、5 作品と *The Court Secret* の手書き原稿、*The Court Secret* の出版されたテキストから、執筆の時間的なずれがないかどうかを考察する。

4. 研究成果

平成 21 年度から 23 年度の間に、1 件の論文発表と 2 件の学会発表を行った。内容の概要は以下の通りである。

「ジェイムズ・シャーリーの『姉妹たち』と清教徒革命」: (2010) では、*The Court Secret* の前に執筆され、劇作家シャーリーにとっては、劇場閉鎖の前に最後に上演された『姉妹たち』を扱っている。

『姉妹たち』(*The Sisters*) は、1642 年の 4 月 26 日にその上演権を宮廷祝典局長 (Master of Revels) のヘンリー・ハーバート (Sir Henry Herbert) によって許可され、国王一座によってブラックフライアーズ座 (The Blackfriars) にて上演されている。そして、1652 年にハンフリー・モーズリー (Humphrey Moseley) とハンフリー・ロビンソン (Humphrey Robinson) の二人により、『新六作品』(*Six New Playes*) という題名で出版される。

作品には清教徒革命が色濃く反映されている。プロローグに、「ロンドンがヨークへ行ってしまった (London is gone to York)」という一節があり、これは、1642 年に議会と対立した国王チャールズ一世が、大勢を立て直すため、ロンドンを離れてヨークへ移動したことを物語っている。

作品中では、本物の公爵は影が薄く、反体制分子であるフラポロの方が、当時の観客の

共感を呼ぶように描き出されている。王党派と目されながらも、時代に敏感であったシャーリーは、正統な公爵よりも、フラポロを観客の側においているのである。劇場がその後18年間閉鎖されることになる前の最後の作品は、宮廷に庇護されながら発展した演劇の一つの時代の最後にふさわしい芝居となっている。

「The Court Secret の Manuscript に描かれた Pedro をめぐり一考察」：(2010)では、手書き原稿ではその性格とドラマが描かれたペドロの存在を注視した。1653年に出版されたテキストでは、ペドロは秘密を握っているため主人に脅威を抱かせる重要人物であるが、ペドロ自身は描かれていない。主人公である王侯貴族にのみ焦点が置かれている。マニュスクリプトのなかでは、ペドロは他の侍女たちや召使たちと会話を交わすことで性格付けがされ、ペドロ自身が窮地に立たされるドラマも用意されている。

Howarth は、マニュスクリプトでは、メンドーザがペドロがあまりにも好色なので我慢が出来ずに地下牢に閉じ込めてしまう。一方、出版テキストのペドロは改善され、洗練され、地下牢に入れられることはない。洗練された結果喜劇的な場面になって、好色ぶりは除かれて、メンドーザは断固とした態度に出ることが出来ないと考えている。

また、Howarth は侍女達のシーンが減らされたり、カットされたりしているのは、主筋と関係がないからと説明する。

カットされた侍女達のシーンは、実はペドロの性格付けの部分である。マニュスクリプトでは、ペドロと召使や侍女との会話を通して、ペドロが横柄で好色であることがわかる。マニュスクリプトでは、ペドロは召使や侍女の上位に立っていたのに、やがて力関係が逆転するという憂き目に合う。出版テキストでは一度も窮地に立たされることのないペドロのドラマがマニュスクリプトにはある。

手書き原稿に修正加筆された部分からもペドロが重要であることがわかる。ペドロの入退場が加筆されていることもある。マニュスクリプトにおいても、それを元に作られた上演用台本でも、ペドロの存在が大きい。

2つのテキストには重なりあう言葉がありながら、展開が変わっていくことがある。マニュスクリプトの修正が出版テキストに反映されていないことから、出版時に作家の手元にこのマニュスクリプトは存在せず、作家はこのマニュスクリプトのその前の版を目にしながら原稿を書きなおしたことがわかる。さらにシャーリーが何度も作品を書き直し、台詞のやり取りでプロットを動かしていったことも確認できる。

『籠の中の鳥』に込められたピューリタンへの挑戦」：(2011) ジェイムズ・シャーリー

は『籠の中の鳥』の出版にあたり、タイトルを変更し、ピューリタンのパンフレット作家ウィリアム・プリンへの皮肉に満ちた献辞を添えている。17世紀前半、ピューリタンは芝居を墮落の元として攻撃していたが、中でもプリンは女性が舞台上がることを糾弾し、それが宮廷内で劇を演じたヘンリエッタ・マライア妃への誹謗中傷とみなされ、プリンは牢の中で、判決を待っていた。『籠の中の鳥』は、作品中にも、自由を奪われた鳥のイメージがちりばめられているが、プリンへの皮肉を加えることで、「籠の中の鳥」の言葉には、何重にも意味がかけられることとなった。

作品においては、女性達が劇中劇としてダナエとジュピターの物語を演じるシーンがある。『ヒストリオマスティクス』で、プリンは、女性が髪を短く切り、男性の服装をして、大衆の前で台詞を言うことを強く批判した。ダナエとジュピターの物語は、劇中劇「新しい牢獄」として、女性達に演じられるのだが、彼女達は髪を切ることも、男性の服装をすることもない。また、大衆はアラス織りに織られた人物に過ぎず、やじられたり、その品位を落とされる危険もない。シャーリーはあたかもプリンの批判をかわすように劇中劇を作劇している。女性達のなかで女性達だけで演じられる芝居は、宮廷で制限された観客の前で王妃が演じる芝居と同じ状況にある。「籠の中の鳥」は自由を奪われた鳥であるが、それはまた、外部との交流を断ち切った制限された安全な場所でもある。宮廷内の劇は、宮廷内だけで上演される劇であり、外部から批判されるものではないことを、シャーリーは伝えている。こうして、シャーリーは王妃マライアを擁護しているように見える。

作品の出版を通して、シャーリーは自分の立場を明らかにし、ピューリタンへの挑戦状を書いているようにも思われる。シャーリーは、この出版を通して宮廷内での自分の地位を固めた。しかし、この出版が、宮廷と作家、ひいては宮廷と劇団、劇場の結びつきを知らしめ、それまではっきりしていなかったピューリタン対宮廷の構図を印象付けることにもなっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

石原万里 ジェイムズ・シャーリーの『姉妹たち』と清教徒革命 福島工業高等専門学校研究紀要 51, 83-90, 2010

〔学会発表〕(計2件)

石原万里 The Court Secret の Manuscript
に描かれた Pedro をめぐり一考察 東北英
文学会 仙台白百合大学 2010.9.25

石原万里 『籠の中の鳥』に込められたピュ
ーリタンへの挑戦 英米文化学会第 29 大
会 大東文化大学 2011.9.10

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石原 万里 (ISHIHARA MARI)
福島工業高等専門学校・一般教科(英語)・
教授
研究者番号 : 70280344